

「働くこと」の豊かさを取り戻すための思考

労働者協同組合法を成立させた大きな要因は、疲弊した地域社会を立て直すための手段として期待が高まったことにあると思うが、一方で、人間らしく生きたい、人間らしく働きたいという人びとの願いが法制定運動の原点にあったことを忘れてはならない。経済成長の限界が言われる中、経済効率を最優先する新自由主義政策の推進は格差の拡大をもたらし、「使い捨て労働」や「労働者未満の働かされ方」が横行する社会をつくってきた。それに対して、そうではない人間中心の働き方を渴望する声が、特に若者世代を中心に大きくなっているように感じる。

本号の特集テーマは「『働くこと』の豊かさを取り戻すための思考」とした。いつしか「働くこと」は「資本に従属した賃労働」と同義になり、そこに人間らしさや生きることの豊かさを重ね合わせることが困難になってしまった。「働くこと」に喜びを感じ、自分の成長を感じとれる充実した働き方は不可能なのだろうか。

ここでは、「働くこと」の豊かさを取り戻すために、さまざまな角度からその可能性を考える視点を提示したいと思う。取り上げるのは、昨年12月16日に開催された日本社会連帯機構定時総会・記念フォーラム、今年1月26日に労協連本部で行われた鼎談企画、この2つの企画の報告である。たまたま、協同総研の身近で開催された2つの企画ではあるが、「働くこと」を問い直す題材となると考え掲載することにした。

前者は、法政大学前総長の田中優子氏の講演「江戸から考えるこれからの働き方と社会」と、田中氏と西谷修氏の対談のほぼ全容を編集部でまとめたものである。田中氏の講演では、江戸時代に生きた人びとの働き方、暮らし方、価値観などをご紹介いただき、そこから現代社会に生きる私たちの姿を問い直すことが示唆された。西谷氏との対談では、江戸からガザへ、先住民(先人たち)の生活から学ぶこと、セックスワークの問題と議論は幅広く展開され、働くことから社会を変革することの期待が述べられた。

後者は、伊藤亜紗氏、藤原辰史氏、古村伸宏氏の3名による鼎談で、元々は労協新聞の特別企画(2024年3月5日号掲載)として行われたものであるが、紙面の都合により、本誌にも全文を掲載させていただくことになった。協同労働を中心に据えた議論であるが、「はたらく」と「はたらき」、「協同で働くときの中心」、「アートとしてのケア」などのキーワードをめぐり、目まぐるしく展開されていくスリリングな鼎談となっている。